今江祥智の本

第15巻

童話集四

理論社

今江祥智の本

第15巻

童話集四

理論社

今江祥智の本 第15巻
一九八〇年九月 初版
一九八七年 三月 第四刷
著者 今江祥智©
発行 株式会社理論社
東京都新宿区若松町一五—六
電話〇三（二〇三）五七九一〈代表〉
振替東京九—九五七三六
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

童話集四

麦わら帽子 7
小麦の国 12
麦わらとんぼ 16
内気な海 20
ふたりのモミの木 26
ふたりの鳩 30
ゆきおんな 34
春は花…… 38
わが友ベン・ケイ 42
坂とバラの日々 46
おわりとはじまりと…… 50
ピアニスト 55
ふたりのぼけっと 65
あのこの馬車 73

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こぶし 79
風の首輪 88
雪の帽子 96
涙いろの雨 103
わたしの片隅 113
姉様 120
七番目の幸福 127
くるみいろの時間 134
モーツァルトくん 143
とおりゃんせ 151
朝の光が見えてくる 164
だれがサンタを殺したか 182
あとがき 193
解説 神沢利子 195

編集委員　上野瞭
長新太
灰谷健次郎
装　幀　平野甲賀
装　画　長新太

制　作　小宮山量平
発　行　山村光司
編集担当　日比野茂樹

本　文　加藤文明社
表　紙　ダイニック
カバー　トラヤ印刷
製　本　誠製本
用　紙　十条製紙／日興紙業

今江祥智の本　第15巻　童話集四

麦わら帽子

小さな漁師町の浜から、小舟で半時間たらずでいきつける大きな無人島があって、兄ちゃと友だちは、そこでウニをとるつもりだった。マキはそのあいだじゅう、おとなしく貝がらひろいをしている約束で、つれていってもらえることになった。

ほんとは、神戸のおじさんがおくってくれた大きなみどりいろの麦わら帽子をかぶりたかったからで、そいつは、そのふるびた漁村の海辺でかぶるには、しゃれすぎていたのだ。かんかん照りの小舟の上でなら、おおいばりで日よけがわりとかぶっていられたが、そいつをかぶっている自分のことを想像すると、マキはやっぱりまぶしいおもいで、頭がよけいあつくなった。帽子のせいで、きゅうに大人びて見えるマキのことが、兄ちゃも友だちも、ちょっぴりまぶしそうだった……。

浜と、目的の島とのちょうどなかほどあたりに、いまひとつ小さな無人島があって、そこは潮がみちると、岩山の先っちょだけのこして沈んでしまうほどかわいいものだったが、そのそばをいき

すぎるとき、マキが声をあげた。

—あ、カモメ。とべないでいるみたい。

おりてしらべると言いはって、舟をつけさせた。かけよって見ると、やはり翼をきずつけたらしいカモメが、首をたて、くちばしをつきだしてむかってきた。

—わたし、ここにのこる。

言いだしたらきかない口調のマキに、

—じきに潮がくるで、いかん。

兄ちゃはとめたが、マキは動かなかった。勝手にすっとええわ……。おしまいに、しぶい顔で兄ちゃはふくれ、マキをのこして、舟をだした。舟はすぐに小さくなり、大きな無人島の島かげをまがって、消えた。

しょっぱい風の中で、マキは長いことカモメとむかいあっていたが、カモメは無事なかたほうの翼で砂をとばしてマキを近づけなかった。なにかにおびえたようなはげしさなので、おまえの傷のことを心配してのこってやったのに……と、マキも舌うちしたい気もちになりかけたが、そこでやっと、カモメは麦わら帽子におびえているのだと気づいた。見知らぬ大きな鳥にでも見えて、こわかったにちがいない。

帽子をぬぐと、日の熱さがあたまを燃やした。それでも、カモメがおとなしくなったのに気をよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くして、マキは髪のほてりを忘れていった……。

ウニの数が多いのにむちゅうになって、兄ちゃたちも、マキのことを、うっかり忘れていった……。

潮が、みちはじめる。

小島は海に、おぼれはじめる。

だいじなだいじな麦わら帽子なのに、マキはそこへカモメを入れていた。おとなしくはいってくれたことがうれしくて、麦わら帽子がぬれてしまってだめになることはかまわなかった。早くつれてかえりたい——とあせる気もちを、海のつめたさがくるぶしからひやしていった。のこされた岩山のすみっこで、マキは麦わら帽子をかかえこみ、舟を待った。

声をあげてみても、はじまらなかった。

ひざからももまで、海がひたした。マキは立ちあがり、くちびるをかんでむこうの島の角を見つめた。カモメもおとなしく帽子におさまっている。海のにおいがつよくなる。マキは、島を見つめることに疲れ、ちっとはこわい気もちにもなって、カモメを見つめることにした。小さなひとみの

中にうつる自分の小麦いろの顔がくしゃんとゆがんでべそをかいていた……。

海が、おへそまであがってくる。

マキは麦わら帽子をさしあげる。じきに疲れて腕がしびれてくる。

麦わら帽子がゆれる。

そのゆれにおどろいたようにカモメが大きく翼をさしあげ、はげしくはばたかせた。それが小さな白い旗に見えて、

—あ、あそこじゃ。

兄ちゃたちが、舟をまっすぐにとばせてくることができた。

小舟にひきあげられて、やっとおぼれずにすんだマキは、口をきかず、ひきあげた兄ちゃたちも口がきけず、カモメのはばたきの音だけが、みょうに大きくきこえた。

マキの言いたいことばは、ぐっしょりぬれた麦わら帽子をだきしめる、か細い腕が語っていた……。

*

麦わら帽子はかわいたけれど、形がくずれ、色もおちて、おかしなプカプカの帽子になってしま

った。

けれどもマキは、おおいばりでそいつをかぶって浜を歩く。そんなマキの頭の上を、犬みたいにつきまとってとぶカモメがいて、マキはそれがとくいだったのだ。

兄ちゃたちは、ひと夏じゅう、マキも麦わら帽子もカモメも、まぶしくて見ることができなかった……。

小麦の国

香代ちゃんは麦ばたけが好きだった。

麦が穂をつけ、気もちのいいくらいそろって風にゆれるころから、麦のみのるころまで、麦ばたけはかっこうのかくれ場所になる。こがらな香代ちゃんが、はたけのなかにかけこんで、ちょいと腰をおとすと、もうとうちゃんでも見つけにくい。

幼いころから、よくへまをやって（とうちゃんの大事な徳利と盃をママゴト遊びにもちだして、わってしまう。かあちゃんのとっときの口紅で隣のネコのギンヤンマをていねいに化粧してやる……など、へまのたねは、いくらでもあった……）、

―こらぁ、香代っぺのしわざだなァ！

いつも同じせりふでどなられたときには、もう家にいない。裏からはだしではたけへ一目散……。

もっとも、麦が芽のころから麦ふみの季節には、かくれ場所としては役にたたないから、叱言と、

ときには小さなげんこつの一つくらいをがまんしなければならなかった。香代ちゃんのほうにも言いぶんがあったけど（それは、ちゃんときまっていて、「そんな大事なもんなら、肌身はなさずもってりゃええに……」）口にはださず、かわりにあとで、やはり麦ばたけにでて、思いきり麦笛を吹いてやった。また、ひょいと家を出たきりもどらず、夕暮れどきまで、すとすとすとと麦ふみをつづけた。麦笛の鋭い音は、香代ちゃんの胸のもやもやを空まで吹きあげてくれたし、地面を見ての長い長い時間の麦ふみは、頭につまったいやあな思いをからっぽにしてくれた……。

そんなわけで、ある日も（ちょうど麦がみのって、あと三、四日もすれば刈取るところだった……）、

—こらぁ、香代っぺのしわざだなァ！

どなられるのと同時にとびだしていた。手にしたものをおくひまもなかったのは、そいつを使っての「仕事」に夢中だったからで、麦ばたけにかけこんでしゃがんでからも、そいつを旗竿のようにしっかり立てていた。

なのに、そのことにも気づかぬくらい、香代ちゃんはあわてていたのだ。そこへ、すぐ前の麦のあいだから太い腕がぬっとのびてきて、香代ちゃんのにぎっているもの——釣竿をぐいとつかんだから、とびあがってしまった。声もたてられずに、目ばっかりまんまるに見開いた香代ちゃんの前に姿をあらわしたのは、見たこともない男の子だった。黙って竿を横に倒し、

—これでだいじょうぶ。
にっと笑ってから、
—池の鯉、釣ったな。
見てきたように言った。まだ口もきけないでいる香代ちゃんに、
—どうしてわかったのかなって思ってるな。
アマノジャクみたいに、香代ちゃんの心を読んだようなことを言った。そこでまたにっと笑って
(それでやっと香代ちゃんは気もちがらくになった)、
—おれもよくやるからさ。
—なあんだ……。
安心して言ってやると、
—女にしちゃ、いい度胸だ。気にいった。
大人みたいにえらそうに言った。腹がたったので、
—ここ、うちのはたけよ。
きつい声できめつけてやると、
—ごめんよ。
あっさりとあやまって、つづきがうちのはたけだから、境目がわからなかったんだ、それにおれ、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com